

竹原地方における蕉風俳諧の伝播

はじめに

芸備地方の俳諧については、すでに、下垣内和人『芸備俳諧史の研究』（赤尾照文堂、昭49）ほかにより、研究され、その概要が紹介されている。それらは、中国地方の全域を対象としたものである。取り上げられるべき多くの史料について、主として紙幅の関係からであろう、細かい分析がなされているとは言い難い。

そこで、本稿では、それらの論考を踏まえさせていただきながら、竹原地方という一地方に限定し、俳諧がどのように広まっていったのかについて、可能な限り徹視的に検討していくことを試みてみたい。

一 支考来遊

(1)元禄期に見る支考来遊

芭蕉没後、蕉風俳諧はその門人達により地方に伝播していっ

た。それぞれが流派を樹立し、勢力範囲を広げていったのである。芸備地方、中でも竹原という地を取り挙げ、その伝播の様相を考察していくことにする。

元禄十一年（一六九八）五月、美濃派を樹立したと言われる支考（一六六五—一七三二）が、筑紫行脚の途中で竹原に立ち寄っている。支考の筑紫紀行句文集『梟日記』に、次のように記している（傍線は筆者。以下同じ）。

十七日

安藝國

この竹原といふ所は山を箕の手におひて前に汐濱あり何かゆふへのといへるたひねの心にもかよひてあはれむへき住ところなりしかむかしのおと、はうつしてたに見給へるにさなく見る事のめつらしければなにかし一雨亭にこのほとんやとりそもとめ侍る

五月雨の汐屋にちかき焼火かな

十八日

此日梅睡亭にまねかる是も汐濱の中にありて千山も万水ものそみたまふましき別墅なり今日はことに片照片降とかいふ空のけしきなればよのつねにはあらていとよし夏菊に濱松風のたよりかな

十九日

例のさみたれにふられて竹原を旅たちけるに流水のおのこ心ありて林光庵の辻といふ所におくり來る道のほと二里はかりもあらん是に留別の句かきてつかはしける

我影や田植の笠にまきれゆく

支考は、当年・元禄十一年に初めて竹原を訪れたと思われ、竹原に対して新鮮な印象を受けたことがうかがい知られる。同時に、支考の新しい門下として、一雨、梅睡、流水らを認めることが出来る。

(2)宝永期に見る支考來遊

支考が再び竹原を訪れたのは、宝永二年（一七〇五）のことである。この年、竹原俳壇の棟梁とされた一雨の追善俳席が設けられ、その主催者が支考であった。一雨追善集『懐日記』に、次のように記される（句に付する番号は私に施した番号である）。

其箕號

西花坊

210 簸て見れハその華咲ぬもの、種

此子ハ一雨のわすれかたみにして風雅ハ父の名をくたさずとやまことに箕裘の業をつける事のとしいまた十五にはミタさるへし

211 石竹を枕とおもふ昼寐かな

其箕

かの一雨亭にとふらひて牌前にむかしのちきりをかちかち此句のしほくしき事感すその親のあらましかハいかに嬉しからむとおもへと位牌にむきて此事をいふ成へし

212 撫子のたもにおかん我なみた

支考

（以下、如柳、除風、秋水、春艸、時習、釣舟、梅睡による連句）

支考は、一雨の子に思いをたくして俳号を付けるなど、生前の一雨と親交が深かったことが分かる。又、この追善俳席を通して、如柳ら竹原俳人とのつながりも強くなったと言える。

支考が竹原を旅立とうとする時に詠んだ句が、竹原市・吉井耕一氏宅に残されている。

今日は旅た、むといふに如柳のぬしにと、められてしハらく首途の膳にむかふ

支考

野あそひや笠きて膳にゆりの花

この右の一句と『懐日記』の其箕號の句は、宝永二年刊、磐古編『六華集』（「蕉門名家句集一」所収）の支考による

「乙酉紀行」にも収められている。その前後を引用すると次のようになる。

誰まつ山にほと、ぎすも鳴ましとて、けふは今治のみなとより竹はらのかたにふなわたりす。大崎といふ磯づたひに蛸とらふる人を見て、それはわれくが弟法師なるを、などさはつらきめ見するぞと、声く にたはぶれゆく

油断すな袖の花咲ぬいその蛸

竹原春艸亭

竹はらやたけのこ時の小鮒売

其箕号

簸てみればその花さきぬ物のたね

「此子はなにがし一雨のわすれがたみにして、まことと箕裘の業をつける事の年いまだ十五にはみたざるべし」ト添書セリ

如柳亭

野あそびや笠置て膳にゆりの花

海田流水亭

(上略) けふの旅麻を爰にとゞめんといふに、麦こきの哥もかまびすしう見世は米買質おきにまぎれたり (下略)

月華の質置かへむほと、ぎす

宝永二年の支考来遊は、『三日歌仙』にも、

宝永二年ノ夏西華坊西国ニ下向アリシニ安藝ノ国廣嶋ヨリ柳江井炊カトモカラヒソカニ告狀ヲ通シテ中国ニ風雅ノ旗ヲアケント云フ (下略)

と記される。宝永二年の支考来遊が何度もあったわけではなく、一回のみであったと思われる。

支考は着実に、門下を広げていき、竹原俳人も影響を強く受けたと考えられる。以下、実際にどのような俳人がいたのか、次項で検討していくことにする。

(3) 支考と竹原俳人

支考来遊時、支考と俳席を共にした俳人達が、竹原俳壇を構成する主要俳人と考えられる。同時に、支考の門人・弟子として位置付けることが出来る。

元禄十一年の支考筑紫行脚において、土地土地の俳人の句を収集したものが、『西華集』である。上巻では支考による句評も付され、竹原俳人との交流も知ることが出来る。

安藝

竹原

49 蓮池は吹ぬに風の薫かな

50 箸も一度に切麦の音

51 あたまはまるまねに座頭のにつとして

52 雨の降日は淋しかりける

一雨

時習

支考

孤舟

53 磯ちかき野飼の牛の十五六

雲鈴

54 宿かりかねし旅の御僧

梅睡

55 あらし立今宵の月は細くくと

一故

56 粟刈れても鶉啼なり

如柳

第一 不易の真也吹ぬに風のと轉倒したる所よりミレはかならず蓮池の薫のミならんやかの琴上の南風なるべし

第二 其場也箸も一度にといひよせて切麦の涼しき音をあつめたる廣き寺かたのありさまなるべし

第三 其人の一轉也給仕の者の手もとちかく末座はかならず按摩の座頭ならんされは此下の五もしにいたりて一朝一夕の工夫にあらす百練の後こゝにいたる句に雑話をはなる、事誠にかたしとうけたまはりしか

全

57 山陰は哥の遠のく田植哉

春草

58 昼寐そろハぬ庵の涼風

釣舟

59 から笠に皆俳諧の名をかきて

支考

60 三日四日の月の宵の間

流水

61 雁啼て湖水を渡る鐘の声

似水

62 早稲も晩稲もある、軍場

樗散

63 今の世は子共も酒をよく呑て

雲鈴

64 もたれか、れはこかすから紙

高吹

第一 不易の行也田植の比はそともにはきはひてをのれか内この淋しさ何となくいひなしてあしからす

第二 其場也観音坊の心よけに在家の蠅の中よりハと明暮に遊人のたへさるかさるは小たかき所の庵と見るべし

第三 其人也昼寐のうちに日和あかりて我ハ夕食の約束ありかれは髪よりの手つたひにとて一度に立さハきたるか傘のまきれ殊にやかましか、る道楽は俳諧師ならんと見られたるいと口おし

句は、表合の形式で、百韻全体の姿を表八句の中に込めようとしたものである。支考独自の句解で、発句を起(客)、脇句を定(亭主)、第三句を轉(相伴)とし、発句は不易・流行と真草行の両面から規定し、脇句と第三句は、時宜・時分・時節・天相・観相・其人・其場によって規定しようとする。この句解にそつて、第三句まで支考による評価がなされている。竹原俳人は、大いに影響を受けたと思われ、支考の俳風が浸透していったのではないかと考えられる。

このほか、竹原俳人の名は、他の俳諧集にも見える。主要俳人の名前と出句・入集の状態を一覧表にして示すと、次のようになる。それぞれ竹原の俳人としての扱いがなされてきた人々であるが、何らかの事情により他書において他地方の

俳人の扱いがなされている人々も含めた。
人名表Ⅰ

高吹	釣舟	秋水	似水	時習	如柳	梅睡	春艸	一故	一雨	流水	海園	林角	ミヤジマ	凉菟	支考	
									1							元禄11 泊船集
1	1		1	1	1	1	1	1	1	1					2	竹原で 乾
1		1	1	1	1	2	3	1	4	1	4				14	坤
			1			2	1	1	2							野か らす
				1	1		1			1						元禄15 三日 歌仙
							1	12	30	1	1	25				①
	1	1	1	1	1	1	2		(追	1					1	②
	4	2		4	5	4	5		善)						6	③
		○	○	○	○	○	○	○	○	○					○	吉井家 文書

☐ 数字は句数を示し、吉井家文書は有無で表わしている

平次	除風	路春	凡鳥	不曲	梅雨	曲系	加友	一松	其箕	春好	和水	通仙	一風	一笑	孤舟	楞散
	1														1	1
	3									1	1	1	1	1		1
2									9							
		1	1	1	1	1	1	1	2							
	5															
		○	○	○		○		○	○						○	

支考が竹原を訪れた元禄十一年以前の俳諧集において、竹原俳人の句が収められているのは、風国編『泊船集』（「蕉門俳諧集一」所収）のみであるが、支考来遊をきっかけに、以後、竹原俳壇は活発化していったようである。支考と直接関わりを持たない俳諧集である湖月斎秋石編『野からず』（大内初夫翻刻『近世文芸資料と考証』第七号所収）にも、収句されており、一雨、一故、春艸、梅睡、似水といった代表的竹原俳人の句を収める。その中には次のような例もある。

70 ほたるの火やそれさへ暑き田草取

7本抄取
春竹

作者が、春竹となっているが、他の俳諧集にも春竹という俳人は見えず、春艸を誤って、春竹とした考えられる。

竹原俳壇の中心に位置し、棟梁とされた一雨没時には、竹原連中よって一雨追善集『懐日記』が編さんされている。ここで、その『懐日記』について見ていくことにする。

序

此懐日記ハ一雨病中に廣しまより我方におくられしか今ハなき人のかたみとそなりける誠に此ぬしハ竹原の俳諧の棟梁となりて明暮此道のたのしみ深く臨終のゆふへまてに人のはいかいをそよるこひあへる殊にその子ハ弱年にして父の道に心さしかしこければ此たひ其箕といふ名を西華坊のつけ給へるよりその事もわすれかたく此事も見すてかたくて人／＼追善の一集となして我朋友のこ、

ろさしをたむくるのミ

春艸序

序文で、『懐日記』成立の所以が明らかにされるが、大変興味深いのは、「此懐日記ハ一雨病中に廣しまより我方におくられしか」という部分である。『懐日記』は、一雨没後にすべてが作成されたのではなく、一雨が広島で病氣療養中に、一雨の手によって編さんしたものを含んでいるということになる。確かに、『懐日記』の構成は、一雨の句を含む部分とそうでない部分があり、三つの部分に留意される。

①伊勢の涼菟子つくし行脚とて藝府に下り給へるか不思議に行逢ふて七とセのむかしかたり菴室をおとつれ侍るに東民の留主なりとてあハさりしその事此事かたりあひたるめつらしき事とも申つかハす

②追善

③かの一雨亭にとふらひて牌前にむかしのちきりをかこちかつ此句のしほ／＼しき事を感すその親のあらましかハいかに嬉しからむとおもへと位牌にむきて此事をいふ成へし

（支考による追善俳席）

②、③の部分は、一雨の追善俳席のもので、一雨と親交があったと思われる俳人の句が集められている。特に、③の部分は、支考によって設けられた追善俳席であり、竹原俳人の中でも実力のある中心的俳人の句が収められている。

一方、①の部分には、一雨自身の句が収められ、一雨と伊勢派の涼菟（一六六一—一七一七）らの連句になっている。序文から、以前、一雨が涼菟を訪ねて伊勢へ赴いたことがあること、今回は、筑紫行脚の途中来遊した涼菟を歓待していることがうかがえる。この部分には、竹原俳人の句は表Iで示すように、わずか三名で、残りは、広島俳人の、井炊、露萩、柳詞、工糸、涼隼、涼川、瑞草、里杏、といった俳人の句が収められている。井炊亭で詠んだものを含み、広島が舞台となっている。

これは、涼菟と一雨の個人的なつながりと、広島俳人との交流を示すもので、一雨の俳諧活動は、広島に於いてもなされていくことが分かる。つまり、一雨が、広島で療養中に編さんしたのが、①の部分であると言えるのではないだろうか。一雨は、本名を本庄貞宗と称し、塩浜仲間役を勤めた浜主であるとされる。これは、頼春風の医事覚書きである「張珠甲」中の書留めに、支考来遊時、広島屋吉右衛門（＝本庄貞宗）の家に宿をとったことが記されていることから、一雨＝本庄貞宗となるわけである。

竹原の棟梁と言われた一雨に並ぶ人物として、梅睡を挙げることが出来る。梅睡は、竹原市・吉井耕一氏蔵の俳諧史料から、吉井家四代正盛梅睡のことであると考えられる。吉井家の史料は、便宜的に、「四代正盛梅睡」「五代計暁時代ノ

書ナリ」、「五代計暁時代發句」、「野坡及風律仙呂壺天等之本名吉井梅睡之發句及書翰」、「風律仙呂壺天等俳句」と題が付され、それぞれ整理されている。

梅睡にとつて一雨は、俳諧の師でもあり、良き競争相手でもあった。（以下、吉井家所蔵の文書を引用するに際しては、仮の表題を付し、さらに句には私に番号を施した。）

口上（写一枚）

口上

昨夜ハ御草臥と奉存候

且發句覚申候書付申候

可然、懸御目可被下候

雲やはき蔭の尾ひねるセりなつな

青苔や須崎うちこす浪の音

此二句しかと覚不申候貴様

御句作之様覚申候間右之通

候ハ、懸御目可被下候以上

六月十六日

一雨公

梅睡

梅睡は、一雨に句評を依頼しており、一雨の指導者的立場がうかがい知れる。一方では、梅睡と一雨は競い合い、梅睡が勝つこともあった。

首尾（写一枚）

梅睡勝〔表題〕

首尾

けふ成そ醜女も艶し菖蒲髪
内裏ハ伊達の違ふ帷子

月影に鵜松の竹篦しめさせて

はや何時か鶏の鳴する

心から旅ハ心の休まらず

酒の徳をハ下戸の知まし

剃たちの頭丸雪のこけにけり

子の多きにそ祿の慾有

一ツ宛投る小石も山と成

謂を聞て捨ぬ古宮

岡の木ハ華散て社猶太し

夏近けれハ強き日の足

歌仙の首尾を調えたもので、右には句のみを紹介したが、批点・付墨が施されている。表六句のうちでは、斜線一筋の平点が江山・一雨・梅睡・春草の四句で、一雨と春草句には批言がある。裏六句のうち、斜線二重引きの長点が春草・梅睡の二句、他の四句は平点で、一故・孤舟句には批言がある。梅睡の句には長点の上にさらに桜花の印（点印）が加わっている。各自の得た点を合計した時、一座の中で最多の点を得たのが梅睡であった。

二 野坡流の浸透

支考の影響を強く受けた一雨、梅睡以降、元文期に入ると、広島俳人を通じて、竹原にも野坡流が浸透していくようになる。

野坡流は、野坡（一六六二—一七四〇）を中心に元文期に隆盛を迎え、門下は西国で一千余人いたとされる。野坡流は、広島で早くに定着したと思われ、野坡の高弟である風律は広島俳人であり、元文四年（一七三九）には、巖島連中が野坡を迎えて撰した『伊都岐島八景』が刊行されている。その中に竹原俳人の名は見えないが、野坡流俳人と交流があったことは、吉井家文書により確認できる。以下、吉井家文書を見ていくことにする。

吉井家文書に、「俳人出自」の写があり、

東雄 本逕寺隠居

陽水 日通寺

菴主 須田藤九郎

杜支 清水多源次

風律 木地屋保兵衛

仙呂 天ちく屋市兵衛

梅北 室屋権七

青雨 わかさ屋養子多吉

亭々 金や五郎兵衛

冬羽 加古町山中武平太

知芳 高瀬理兵衛

文五 三たと屋与右衛門

呂舟 米田屋十四郎

淺生庵野坡

右之外門弟御座候

以上の広島俳人は、野坡の門弟で、『伊都岐島八景』と重なる人物である。『伊都岐島八景』では、淺生、風律、青雨、壺天、東雄、仙呂、宜由、牡支、文五、律主、梅丈、知方、冬羽、亭々、陽水が句を詠んでおり、句数の多い壺天の名が「俳人出自」にないのは、大變疑問が残る。仮に、壺天が「俳人出自」を書いたとすれば、納得のいくことではある。「五代計晩時代發句」の包には、壺天の書状があり、壺天とのつながりが認められる。

壺天書状（写一枚）

十二月朔日庚申

三ツ物

委細被仰聞候通致拜吟候中、面白御座候可様ニ成候へハ追々風姿風情も遣申候愚意無御遠慮申述候御發句ニ切字無御座候愚意のへ候へば

うるおふて覗や冬の梅隣

一すし氷る山されの風

第三ノ所居所成、かたく藪に宿屋打越申候植ものも成かたく雜ノ句生類何となくもわさ（と）よし

牛馬の市の噂を触れて來て

此通之御作意可被成候

甲子ノ句

是ハ外に人句ニて御座候由左候へハ遠慮仕候甲子ニ火鉢冬季冬籠りも冬季ニて可様之句ハ空用不申

一、幾甲子はらも古、御座候幾甲子といわすしてよしことわり過申候甲子やといわすして子祭やとしてよし此□句ノ

取廻し面白句ニて御座候へ共幾甲子ノ句たくミ過申候貴様玉句乙月や、除*

子祭や冬のこたへし夜半の風

など、被成候へハ句ノ取まわしよく候

九日巳待、御作句中、御氣つきよく申候暮ノけふと

して年ノ暮ノ句ニ成りかね申候戌辰といふてハことわり

過申候

御とほしの寒けにさゆる巳待かな

可様ニ有たし

脇ノ玉句中、よく御座候ひらく、雪のすしかふて降

句曲、御座候は八面白候第三ハ神風とハ成りかたし發句

神祇脇句外ニて又第三神祇成りかたく神風としてハ伊勢

の神ニかざる様ニ覚申候第三ニ風ハのけたく御座候

藪の中水汲む道をつげかへて

此心に第三可被成候左候へハ三つ物風情そなわり申候

一遊子俳諧祭りハ壺天と申候貴様石亀と可被成候由成程面

白併風雅ノ祭可有御座候是ハ追々工夫仕進候可申候其内

思召可被仰聞候以上

十二月一日

柳眠堂

壺天

石亀雅翁

壺天が石亀の句を批評し、手ほどきを加えている。対象となつ

た石亀の句は、次のものと思われる。

十二月朔日庚申三ツ物 (写一枚)

十二月朔日庚申

三ツ物

1 潤わしき冬咲く梅の藪の許

2 流れのすへは氷の一筋

3 立ならふ宿屋はこゝにきになりて

同五日甲子

発句

4 きのへ子や火鉢に寄する冬籠り

5 幾甲子覺知らすの寒の入

6 乙月や遂ける夜半のきのへ待

同九日戊辰、夜

三ツ物

7 暮のけふつちのへたつ巴待かな

8 ひらく雪のすちかふて降る

9 神か七は元の直氣に吹き寄せて

石亀宛の壺天書状は、十二月十六日付のものもあり(壺天

歳暮、句有)、石亀という人物が、壺天に俳諧の指導を受

けていたことが明らかになる。石亀に関しては、吉井家文書

で「五代計暁時代発句」の包に多く見られることから、石亀

は、吉井家五代計暁の俳名と考えられる。五代計暁は、本米

屋五代半三郎計暁と称し、広島和田屋足立久兵衛末久男で、

養子として吉井家に入っている。

壺天を通じて、広島野坡流俳人への関心は高まり、元文

三年、野坡ら編『六行会』に収句されているものと重なる句

も残る。『六行会』は、野坡が中国地方行脚の折に門人と唱

和した連句、発句を収めたものであり、その句が吉井家のも

のと重なるというのは、興味深いことである。

つれ汐や (写一枚)

困傍注と()内は、『六行会』との異同である。

きのふは厳しま遊ひけふは(諷沙を伴ひ)廣しま

の風友と語る

1 つれ汐や鴨も旅寐の枕かへ

末略ス

浅生

(一株竹のはねる朝霜

(酒買に遊ぶ男の手をかりて

(連衆に隠れ) 三瀧(山) にあそびて

2 松に来て宿に居ぬ日そ冬籠り

(十月十日興行亭主風律)

3 竹に来て猶脚早き時雨哉

4 替釜たきる一日の冬

5 御蔵米野髪の馬のせりあふて

6 あからむ杖のまじる川筋

7 弓張の窓に取置くうつし物

8 もらへは戻す借家のつきやい

末ハ略 以下、浅生、風律、東雄、梅北、壺天、仙呂による歌仙

9 朝霜や湯にかつえたる市戻り

10 しわかれの聲を合すや網代守

11 蕨戸の半かわくや神無月

12 しら山を垣に見越すやつはの花

13 雪花や独稽古の十文字

14 初雪や香積に並る飯の湯気

15 寒菊や白の目切の片手業

16 日当りに猿も里見る落葉哉

17 姿の根をつとふこみちや枯かつら

18 供のなき乗物まはし冬牡丹

仙呂
風律

浅生

全

東雄

壺天

仙呂

風律

生

壺天

全

東雄

風律

全

壺天

梅北

仙呂

全

青雨

19 浦風に木魚音なし朝ちどり

20 取つたに片側町や鉢た、き

21 浦の火のつ、きハ細し鴨の聲

22 時雨るや宿に手をくむ庭作り

23 根からミヤ竹を隣の水仙花

24 凧こらしや燈もやうわた車

25 孫庇苔にふくれるあられ哉

26 狐火のまへや縄手の投頭巾

九句目から二十六句までは、『六行会』では、順不同に記載され、中巻、下巻に収められている。

石亀が、一方的に広島の野坡流俳人に関心を寄せていただけではなく、広島俳人も竹原方面へ来遊し、俳諧活動を行っている。

竹原紀行句文 (写二枚)

後の文月中の五日秋も静に碧浪金波の海つらより月をか、けて浦傳ひせむと小舟を浮めしより風律仙呂も同じ心にうかれともに帆つくりひして夜となく昼となく雑談俚語をたのしむ此時に風雅のまことを述ん事の頼もしく折ふしの風に漕出して長門しまを見渡す

1 鳴立て蹴あます砂や長門しま

壺天

亭々

冬羽

文五

呂舟

知方

律主

陽水

牡支

音渡

2月更て船の軒や瀬戸の聲

3黒鯛の黒き光や瀬戸の月

船中の吟

4船も友誘ふや鳥の渡る空

5日脚きハたつ秋の松風

6名月の置座もようを繪に書て

7槿にひらりと羽織ぬき込

(中略)

此日浦くは網の神祭りて染かたひらに賑ふ

22おとり子の影さす海の一葉かな

竹原

23汐と塩屋烟ニすし秋の色

吉井氏の別亭ハ塩濱の中に一樓をかけ渡し塩焼く業

はまのあたりをさらす山を望み野を臨む風景ものと

してたらずといふ事なきハ主の手柄成へし

24月澄や塩屋の溝のはしり魚

25野ハ色に暮て樋守か多葉粉の火

忠海

26市小屋に赤とんほうの残暑哉

是より僧と俗と岡と船とにわかる

吉和^并

全

仙呂

風律

壺天

人呂

律

仙呂

風律

壺天

風律

仙呂

風律

壺天

風律

仙呂

風律

仙呂

27霧雨の晴のこしてや蜻かくれ

竹原の天満宮を拝す 黒木の鳥井のまへにて

28山は錦鳥井も苔の染下地

(下略)

この紀行は、「後の文月」つまり閏の七月がある年で、元文五年（一七四〇）と推測できる。壺天が、風律、仙呂を連れて、長門島（倉橋島）から、竹原方面へ紀行した時のもので、竹原では吉井氏を訪ねている。同じ句を、竹原の側に立って構成したものが、以下の紀行句文である。（竹原紀行句文」と重なる句に傍線を付し、句番号をほどこした。）

壺天、積亀、風律以下紀行（写一枚）

當所沖、濱にて

1月澄や塩屋の溝のはしり魚

2堤のめぐり露のかくれか

廣嶋沖にて

3野は色に暮て樋守か多葉粉の火

4けほさきす、む厂のひとむれ

西条にて

5名聞の蓋とる窓や月の色

6稲葉に風の揃ふ一すし

當所之川口にて

汐と塩屋烟ニすし秋の色

壺天

風律

壺天

積亀

風律

積

風律

仙呂

積

仙呂

風律

8 あしたの露に竈と潤ふ

9 路のまかりにはゆるよし葦

10 秋野や旅のしまりも松の宿

11 荻干す粟の燈すかゝり火

12 廣鳴出船 之發句

13 日とつかえる秋の小あらし

14 黒鯛の黒き影さえ瀬戸の月

15 底澄む秋の落す波音

菊月十六夜湊御祭禮に詣テ

16 御とほしの影さす月や別れ奈

17 ころむ秋葉の浦の汐風

18 いたく潮のはこふあき風

19 塵に菊波にまじゑてうきぬらん

20 初音とやけさはうつらに起連て

壺天、風律、仙呂の句に、積亀が付句するといふ格好になっている。「當所」としてのことから、竹原俳人による構成つまり積亀の手によるものと言えらる。積亀というのは、壺天との関係から、音の同じ石亀と考えてよいであろう。

石亀は、竹原俳人の中心的存在であり、

石亀亭徒然に暮し折から此人は常に風雅に心を寄られし

(下略)

(春枝句詞書)

積

風律

積

壺天

積

仙呂

積

と評されている。広島俳人からは、

むそちの賀に

祝ふ日や庭にもあそふ百千とり

のような還暦の祝の句を贈られるなど、壺天以外の俳人との個人的交流も認められる。

吉井氏の別荘にはしめて塩濱の佳景を臨む

早稲の香や塩やく煙うちなひき

石亀と広島野坡流俳人は交流を深めていったようであるが、石亀以外の竹原俳人と広島俳人の交流は見られない。この点には、石亀つまり五代計暁が、広島和木屋足立久兵衛末久の男で、養子として吉井家に入っていることが関連するのではないだろうか。しかし、石亀が広島と縁深いことのみで広島俳人とつながりが持たれたわけではなく、石亀自身の熱心な俳諧活動があったからと言えらる。

三 元文期以降の竹原俳壇

元文期以降、化政期に至るまで、竹原俳壇がどのような変遷を遂げたのかは分かっていないが、文政十年(二八二七)に、竹原連中による「さくらあさ」が刊行されている。

さくら麻序

(上略) いさ、めの浦しま山さともはせを翁黄泉の後

は書残したまふ言の葉をもてほとんと其墳をしつらふし

かあるに此里に其さたなしやつかれ此末葉のはかなき一

筋にすかりいつしか鬢ひけに霜をくいまに至れと半途にしてみれんなり（中略）紅葉のかつちる頃は普明閣にのほり月上にむかしをしたふ折から爰に翁の塚を造営せは千里をへたつる騒客もいさかしはのこ、ろ通し賸阿の道草しけらん支をいのるは皆此門のみちつれなりと轉風子と語りあひ四疊半の一句に韻をつき一卷をつゝるに（下略）

「さくらあさ」は、竹原の西方寺境内に、芭蕉記念碑「麻刈墳」を建立したことを記念して刊行されたものである。序を記した朝暉が、数年来の念願であった芭蕉記念碑造営を、中心になって推進したようである。

竹原俳人は、朝暉を中心に、葵山、六平、石翁らの名が見える。句数の多い主要俳人は、吉井家文書の短冊にも名を残している。中でも、朝暉は、

其ころはせの直きことは麻の茎の直なるに似たれは其をしへ子も又よくすなほにてこれかをしへをうく
と、指導的立場であったことが分かる。

「さくらあさ」の作者は、竹原俳人のみならず、江戸、大阪、中国地方の俳人も多く見られる。特に、広島俳人の、多賀庵二世六合、三世玄蛙、四世筵史の句が収められていることは、興味深いことである。

多賀庵というのは、広島島の風律（一六九八一—一七八二）が、

明和九年（一七七二）に、「奥の細道」の奥州多賀城の壺の碑に做った板碑を建てたことに由来する。多賀庵初世風律は、広く野坡流を広めていったが、その流れをくむ多賀庵の俳人の句を収めるということは、石亀以降、野坡流が竹原にも定着したからと言えるのではないだろうか。

しかし、文政期には、流派は強い影響力は持たず、流派に捉われない蕉風俳諧の定着があったと思われる。

以上のように、竹原俳壇は、元禄から元文期、化政期に活発な動きを見せている。涼菟・伊勢派の影響を受けながらも、支考・美濃派が強くなり、後に野坡流の影響を受けるといふ様相を見せる。それぞれの時代に、中心となる人物が存在し、彼らの熱心な活動に支えられ、俳壇自体の発展もあつたと言えるのではないだろうか。

本稿は、筆者が提出した卒業論文の一部分である。論文を作成するに際し、貴重な資料の閲覧・調査などに関して、竹原市・吉井耕一氏がお与え下さった御便宜、御援助に対して、厚く御礼を申し上げます。